

菖蒲が迫の婆・浜田市三隅町東平原 令和2年11月17日

収録・解説・酒井 董美 ただよし

イラスト・福本 隆男



語り手 松岡宗太さん（明治29年生まれ）
収録・昭和35年3月13日

あらすじ

那賀郡の国府村（現在の浜田市国府町）に菖蒲が廻という金持ちの家があった。その家のおばあさんはどうも変だとわさが立っていた。ところで越中富山の薬屋が立ち寄り「宿を貸してくれんか」と言ったが、「病人がいるから」断られた。日が暮れたから、薬屋は大木の根元へ荷物をおろし、木に上がって寝たげな。夜、何十という猫がやって来て、下から仰向いて見る。猫たちが肩車をはじめた。ところが一匹足らず届かない。「菖蒲が廻のおばあさんを呼ぼう」と声が聞こえた。薬屋が「おかしい。菖蒲が廻のおばあさんと呼ぼうと言った。こりや変だ」と思っていた。そうすると、今度、大きな猫が来た。そしてまた猫たちは肩車をして、菖蒲が廻のおばあさんといわれた猫が、一番上でやってくる。昔のことだから、薬屋たち

は身を守る山刀を持っていた。猫が薬屋さんの足に手を掛けた。薬屋は山刀でもって切った。すると猫が苦しがつて、皆逃げてしまった。夜が明けたげな。「菖蒲が廻の家を訪ねてやろう」。薬屋さんはそこまで出かけて、聞いたら、「夕べからおばあさんは病気がひどうなつて、のぞくたあできん」と言う。薬屋さんは、「そのおばあさんをわしに診せてくれんか。わしは薬屋でもあるが、元は医者だ。少々脈を診ても病気が分かる。ぜひ診せてくれんか」と言う。

「ほんなら、診しよう」ということになった。そうすると、今度はおばあさんが診ていらんと言うげな。しょうがないので、脈の出る腕へ糸を結びつけ、それを障子の穴から出して薬屋さんが外からその糸を握って脈を診た。「不思議なこりや人間の脈でない。猫脈だ」。薬屋が言ったら、おばあさんが怒りだし出てきた。見ればほんとうに猫だげななあ。薬屋は、今度は飛び込んで刀を振り回してそのおばあさんを殺したという話だ。

それは家で飼っていた古い猫で前におばあさんを取って食うて化けていたんだげな。その家はそれが元になつて絶えてしまうたという。

解説

これは手の込んだストーリーを持つている。「菖蒲が廻のおばあさん」に不審を抱いた薬屋が、おばあさんのいる家を訪ねると、彼女は病者だつたから診てやると言つても、おばあさんに拒否されてしまふ。薬屋さんはせめて脈だけでもと腕に糸を巻いてそれを障子の穴から出して診ることで妥協が成立する。

このようにして正体を現した猫は、最後は薬屋に退治されてしまうのである。

この話とはとても人気がある。松江市では松江藩時代、「小池の婆」として知られているのである。

近隣諸国でも類話はあり、中国や韓国、インドなどでもこれまでに同類が収録されている。

（元島根大学法文学部教授）

